

## 県立大学での日々を振り返って

山田幸恵

岩手県立大学に着任した日、東京はすでに桜が満開でした。車窓から皇居外堀の桜を見ながら、これから向かう滝沢を思い浮かべていました。IGRを降りると滝沢は真冬の景色で、想像を超えて季節を逆戻りしたように感じたものです。雪と氷の路面を踏みしめながら、新しい環境への不安と希望を胸に、県立大学のアーチをくぐったことが思い出されます。

着任してしばらくは、学内のことだけでなく生活上のことでも、驚くことの連続でした。それまでの価値観とは異なる世界に、try & error を繰り返し、毎日を過ごしていました。教育はもちろんですが、どちらかというところから、地域貢献というものを強く意識する環境になり戸惑いもありました。世界を意識して研究を行うことが最終的には地域のためになるという思いでいたため、まず「岩手」のために」という県大の感覚には違和感がありました。それがどうでしょう。今では「岩手」の」が口癖になっています。今現在も、「地域だけを見ては本当に地域に貢献することはできない。地域のためにと考えるのであれば、視野は大きく日本、世界を見据えなければ。」という気持ちに変わりはありません。「岩手」の」は岩手への愛着ゆえの言葉なのだろうと思います。このように愛着を感じるようになったのは、まさに一期一会の積み重ねに他なりません。

壁に突き当たることが多い毎日の中で、たくさんの素敵な出会いがありました。そのひとつが学生のみなさんとの出会いです。講義にも真面目に取り組む学生が多く、教員としてはやりがいのある環境でした。もう少し学生のみなさんが積極的になるともっといろいろできるのにもったいないな～という気持ちもあります。県大の学生さんは自己評価が控えめな人が多く、潜在能力を生かしきれていないように感じています。もう少し自信を持って、受け身ではなく積極的に知的好奇心を発揮してほしいと思います。卒論指導をしていた時などに、ちょっと難しい課題を課しすぎたかな？と思っても、予想以上の成果を出してくる学生さんが多くいました。指導如何で素晴らしく伸びていく

学生さんがいるというのは、教員冥利につきますことでした。どうやら「厳しい」とうわさされていたようですが。。。厳しいのではなく、学生さんの能力を信じていたのです。

学外にもたくさんの出会いがありました。少しずつ「岩手」の感触がわかりかけてきたと思った頃に東日本大震災がおこり、これをきっかけに地域の方々と密に関わっていくことになりました。それまでに災害後の精神保健に関わる研究を行っていたこともあり、できることをしなければいけないと強い力に押し出されるように震災後の支援活動に従事しました。行政、医療・精神保健、教育関係者、地域のみなさんなどたくさんの方に出会い、一緒に仕事をしたり、お話をしたりしました。出会う方々の言葉に力をもらったり、はっとさせられたり、考えさせられたり、と貴重な経験の連続でした。これからも活動を続けていくことはもちろんですが、この縁をつなげていきたいところから思う、素晴らしい出会いです。

在職期間を振り返ると、教育にしても研究にしても震災前と震災後で大きく色合いが異なります。震災前は教育や地域貢献に従事する一方で研究者としての焦燥感がありました。震災後は考える間もなく様々なことに取り組む中で、臨床心理学的地域支援という新しいテーマで研究を開始しました。そして、顔が見える地域との関わりの中で、教育という意味で大学が果たす役割について結果が見える喜びを実感することができました。

私が県大での教員生活をこのように充実したものにできたのも、社会福祉学部の先生方の支えあってのことと思っています。先生方との教育や研究、地域貢献についての語り合いから、視野を広げることができました。着任時はスタートをきったばかりのひよっこでしたが、これらの出会いの中で、大学人として成長することができたと思っています。出会ったすべての方々に心より感謝いたします。岩手県立大学を離れてしまいましたが、一度結んだ絆を大切に、今度は外から、岩手・岩手県立大学を応援していきたいと思っています。